



TITLE:

陰嚢内仮性嚢胞の1例

AUTHOR(S):

坂本, 修一; 沼, 秀親; 岡田, 耕市

CITATION:

坂本, 修一 ...[et al]. 陰嚢内仮性嚢胞の1例. 泌尿器科紀要 1986, 32(2): 282-286

ISSUE DATE:

1986-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/118735>

RIGHT:

陰 囊 内 仮 性 嚢 胞 の 1 例

埼玉医科大学泌尿器科学教室（主任：岡田耕市教授）

坂 本 修 一
沼 秀 親
岡 田 耕 市

A CASE OF INTRASCROTAL PSEUDOCYST

Syuichi SAKAMOTO, Hidechika NUMA and Koichi OKADA

From the Department of Urology, Saitama Medical School

(Director: Prof. K. Okada)

A 37-year-old male visited our hospital with the chief complaint of a mass about the size of a hens egg in the right scrotum. Before hospitalization, he had noticed the abnormal intrascrotal mass. The mass gradually enlarged with pain, so he was admitted on May 23, 1982. Under the diagnosis of intrascrotal tumor, the mass was removed. It was a cyst with enriched geratinoid contents enclosed with thick granulation tissue and adhered to the tunica vaginalis externally. Pathological findings revealed it to be an intrascrotal pseudocyst.

Discussion is made in relation to the histological genesis of this lesion.

Key words: Pseudo cyst, Intrascrotal tumor

緒 言

陰嚢内に発生する腫瘍は比較的まれなものであり、その大部分は睾丸、副睾丸、精索より発生するが、これらとは解剖学的関係がなく発生した仮性嚢胞の1例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

症 例

患者 37歳、男性、大工

初診：1982年7月23日

主訴：右陰嚢内腫瘍

家族歴：特記すべきことなし

既往歴 外傷、感染症の既往なし

現病歴：以前より右陰嚢内に弾性軟で母指頭大の腫瘍を触知していたが、そのまま放置していた。1982年7月21日、突然右下腹部痛、39℃の発熱、右陰嚢の有痛性腫脹を来した。近医にて急性副睾丸炎の診断のもとに投薬を受けるも軽快せず当科受診す。

現症：身長 164 cm、体重 54 kg、全身状態の視診では異常を認めない。胸腹部理学的所見に特記すべきこ

となし。右陰嚢は小児手拳大に腫脹し、腫瘍は外側から右睾丸を中央側へ圧排しており、周囲組織と癒着し可動性に乏しかった。また陰嚢皮膚に発赤は認めない（Fig. 1）。右睾丸、副睾丸は触知可能であったが精索は明らかでなかった。左睾丸、副睾丸、精索には特に異常を認めなかった。なお腫瘍の透光試験は陰性であった。

入院時検査成績：末梢血において白血球数 11,300/mm³、血液像で核の左方偏位を認めた。検尿、血液生化学、血清電解質に異常なし。

X線検査成績：胸部X線写真、排泄性腎盂造影で異常なし。

超音波検査成績：transverse scan にて右睾丸とは全く別に嚢腫状の腫瘍が認められ、壁は肥厚しておりその内部には中隔も認められた（Fig. 2、上段、下段）。

手術所見：同年7月29日、右陰嚢内腫瘍の診断のもとに腰椎麻酔下に手術を施行した。腫瘍は睾丸固有鞘膜と下端で癒着していたが容易に剝離可能であった（Fig. 3、上段、下段）。



Fig. 1. 外陰部所見：右睾丸は腫瘤により中央へ圧排されている

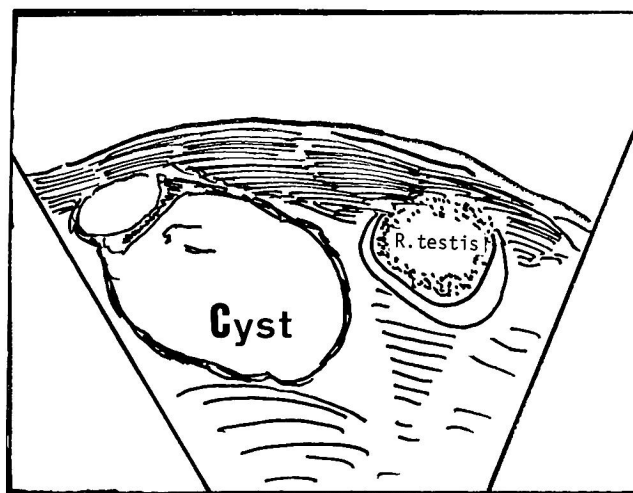


Fig. 2. 超音波検査所見とそのシェーマ

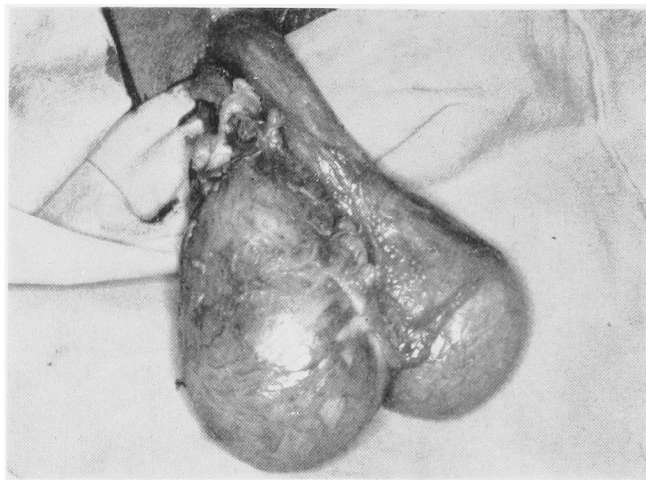


Fig. 3. 手術所見：腫瘍は右睾丸固有鞘膜と容易に剝離できた

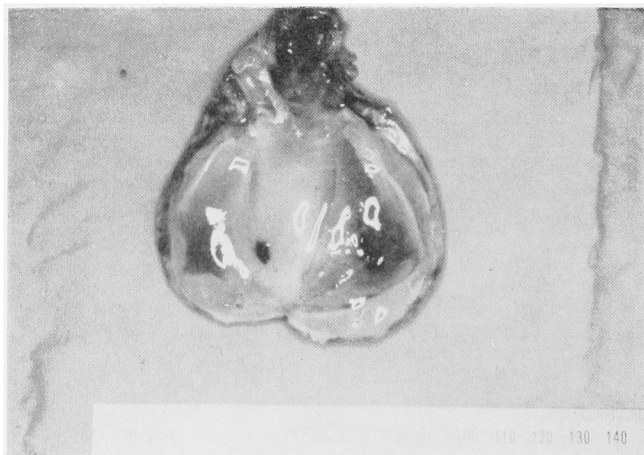


Fig. 4. 摘出標本の剖面：肥厚した壁と、内腔にゲラチン様の液体と出血を認める



Fig. 5. 病理組織所見 (×40): 壁は主として線維性の肉芽組織より成り立っており, その内面には明らかな被覆細胞は認められない

腫瘍の上端部は外鼠径輪まで連続していたが, そこで先細りとなり盲端状を呈して終っていた. 右睾丸固有鞘膜を開いて睾丸, 副睾丸, 精索に異常のないことを確認したのち, 睾丸水腫軽度認められたため Winckelmann 氏法を併せて行い手術を終了した.

摘出物所見: 重量 70 g, 大きさ鶏卵大の弾性軟の嚢状腫瘍であった. その断面は肥厚した壁と, 非常に粘調度の強いゲラチン様の内容物からなっていた (Fig. 4). 細菌培養, 細胞診とも陰性であった.

組織学的所見: 内面に fibrin 沈着と出血を伴う嚢胞であった. その壁は主として線維性の肉芽組織から成り立っており, 中皮細胞や内皮細胞などの被覆細胞は認められなかったため仮性嚢胞と診断された (Fig. 5).

考 察

陰嚢内に発生する腫瘍はそのほとんどが睾丸, 副睾丸, 精索より発生するがそれ以外は極めてまれである. 陰嚢内に発生した嚢胞は, 1845 年, Cooper¹⁾ が 4 例を報告したのに始まり, その後 1929 年, Frater²⁾ が剖検時に偶然発見された 1 例を報告している. また発生頻度では 1952 年, Arcadi³⁾ が Johns Hopkins Hospital における約 46,000 例の外來症例において 3 例にみられたにすぎないと報告している. その後, 陰嚢内嚢胞に関する多数の報告があるが, いずれも嚢胞の解剖学的位置関係や組織学的な記載が必ずしも明確ではない.

今回, われわれは陰嚢内嚢胞性疾患を Table 1 のごとく分類し本症例との関連につき考察を行った.

Table 1. 陰嚢内嚢胞性疾患の分類 (ただし, 睾丸, 副睾丸, 精索より発生したものは除く)

先天性・	・腹膜由来の嚢胞
	陰嚢縫線嚢胞
	真性粉瘤
	皮様嚢胞
	上皮嚢胞
後天性・	・仮性粉瘤
	外傷性上皮嚢胞
	皮脂腺嚢胞 (毛嚢嚢胞)

陰嚢内には先天性嚢胞の他に後天性の皮脂腺嚢胞 (今日では毛嚢嚢胞という) と外傷性上皮嚢胞の存在が記されており, 後天性のほうが一般的であるという⁴⁾ (Table 1).

自験例においては以前より陰嚢内に腫瘍を触知していたというが, 果たして先天性の嚢胞か, 本症例は臨床上, 明らかに局所の疼痛を伴い高熱を発しており炎症所見が摘出術のきっかけとなった. その発生部位の解剖学的位置関係や組織学的所見から発生母地及び病因論については明確に示すことは困難である.

本邦における報告例は調べた限りでは見い出せない. わずかに類似例の報告を 4 例認めた⁵⁻⁸⁾. いずれも陰嚢内に発生した先天性嚢胞であり, 部位は陰嚢内ではあるが睾丸, 副睾丸, 精索とは関係がなく総鞘膜外に発生している. 組織学的検索によると表皮及び真皮乳頭層を壁とする上皮嚢胞が 3 例⁵⁻⁷⁾, 全皮膚層を壁としこの壁に皮膚付属器官をそなえる皮様嚢胞が 1 例⁸⁾であった.

しかし自験例では壁は肉芽組織で成り立っており, 内面に明白な被覆細胞が認められずまた皮膚付属器官を思わせる所見もないため仮性嚢胞と診断したが発生

母地は不明であった。

いっぽう、嚢胞形成の原因については従来より種々の仮説がある。すなわち、1) 貯留説、2) 炎症説、3) 外傷説、4) リンパ管拡張説、5) 先天異常説、6) 原因不明などであるが⁹⁾、いまだ明らかな機序は解明されていない。その中でも外傷に起因する嚢胞は、いわゆる仮性嚢胞であり明らかな上皮で覆われることがないという¹⁰⁾。

1979年、Inczeら¹⁰⁾は仮性嚢胞と思われた副腎嚢胞を電顕で詳細に観察し、リンパ管内皮細胞を認めたことにより、仮性嚢胞は外傷を受けたり出血を繰り返すことにより嚢胞壁の内皮細胞が膠原線維に置き換ってできたものであると主張している。自験例においては外傷の既往もないし、局所の炎症が繰り返された既往もない。ただし摘出物の内壁から膠原線維が発見されている。したがって同様の発生機序が存在したのではなかろうかと考えられた。

結 語

37歳男子の陰嚢内で総鞘膜外に発生した仮性嚢胞の1例を報告した。著者の調べたかぎりでは本邦に同一報告例を見い出しえなかった。

本症例の要旨は第428回日本泌尿器科学会東京地方会において発表した。

文 献

- 1) Cooper AP: Quoted by Frater, K.
- 2) Frater K: Cysts of the tunica albuginea (Cysts of the testis). J Urol **21**: 135, 1929
- 3) Arcadi JA: Cysts of the tunica albuginea testis. J Urol **68**: 631, 1952
- 4) Campbell MF and Harrison JH: Urology, 4th Ed., Chap 34, 1200 ~ 1212, Saunders, Philadelphia, 1979
- 5) 関根昭一: 陰嚢類表皮嚢胞の一例. 臨泌 **28**: 823 ~ 826, 1974
- 6) 平野哲夫・折笠精一: 極めて稀な陰嚢内腫瘍 (Epidermoid cyst). 日泌尿会誌 **64**: 84, 1973
- 7) 陳 瑞昌・小路 良・佐々木忠正・寺元 完・柳沢宗利・島田 作 陰嚢内表皮嚢包の一例. 臨泌 **32**: 285 ~ 287, 1978
- 8) 鈴木茂章・津ヶ谷正行・島田政佑: 陰嚢皮様嚢腫の一例. 日泌尿会誌 **67**: 207, 1976
- 9) 重松俊朗・松岡 啓・谷村 晃・長 卓徳: 辜丸鞘膜臓側板より発生した嚢胞の一例. 西日泌尿 **38**: 98 ~ 100, 1976
- 10) Incze JS, Lui PS, Merrian JC, Austen G, Widrich WC and Gerzof SG: Morphology and pathogenesis of adrenal cysts. Am J Pathol **95**: 423 ~ 432, 1979

(1985年5月22日受付)